

芭蕉の谷村入峠とその作品

芭蕉が谷村へ入峠したのは、芭蕉庵類焼により谷村の廻塙邸に世話になったときと、甲子吟行の帰り、貞享二年（一六八五）の四月甲斐に入つてわざわざ郡内に寄り道しているときである。多分廻塙から文通があつて勧誘されたものであろう。

この時の逗留は、帰り道尾張の鳴海を四月十日に立ち、名古屋から木曾路、甲州路を経て江戸への帰庵は卯月（四月）の末であった。その間は二十日ばかりで、谷村の高山邸に泊つたとしても二、三日位であつたと思われる。この時の資料として、芭蕉から空水宛の書簡がある。

追而申入候。此中はふじに長々逗留、其上何角御世話に成候へば、別而御内方様御世話に候。いそがしき中に、うかうかいたし居候而きのどくに候。長雨によりこめられ候事、とかうに及びがたく候

行駒の麦になぐさむやどりかな

いざれもよろしく御まうし可被給候。くはしきは重而々以上

桃青

十三日
空水様

この空水については誰であるかわからないが、「ふじに長々逗留」とあり、富士に間近なところと推察できる。たぶん山中、吉田、或いは谷村の俳人ではないだろうか。

甲州における芭蕉の句は、文献では「夏馬の遅行」再案の「馬ぼくく」の句と、「行駒の」「山賊の」の三句が正確な吟詠とされているが、それ以外に廻塙と関係して確実と信じられる句もあるので、研究家の発表をもとに整理してみたいと思う。

馬ぼくくわれを絵に見る夏野かな

「泊船集」許六書入れ、「赤冊子草稿」、「三冊子」、「蕉翁句集」、「続年矢集」、「水の友」などにこの句形で見える。芭蕉庵類焼による甲斐谷村に流寓中の天和三年の作で、「葉集」付合え部に載せる廻塙、一品との三吟歌仙の発句に、

夏馬の遅行われを絵に見る心かな

とあるのが初案であろう。「葉集」発句之部には別に「甲斐の郡内といふ所に致る途中の苦吟」と前書きする。

夏馬ぼくぼくわれを絵に見る心かな

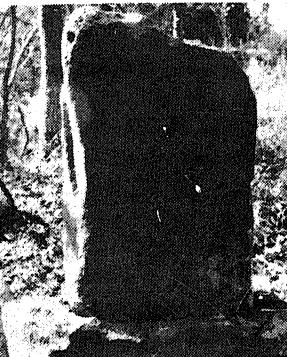
の句形を収めている。塵封旧蔵の芭蕉真蹟短冊中に

馬ばくぼくわれを絵に見ん夏野かな

とあるところを見ると、下五「心かな」から「夏野かな」への改稿は、おそらく甲斐流寓中に谷村でなされたものと思われる。「絵に見ん」から定稿の「絵に見る」への推敲がいつなされたのかは明らかでない。

なお「泊船集」には、下五「枯野かな」の句形で収めて、傍に「この句夏野かなともある人申されし」と註をつけてある。また「水の友」に「此句、泊船集に冬野哉とあやまるゆへこゝにしるす」と訂誤しながら、枯野を冬野にして誤りを再び重ねている。

「水の音」には画譜として詞書が載っている。



芭蕉句碑「馬保久保久我を絵に見る夏野哉」
所在地 大月市猿橋町藤崎

画 譜

かさ着て馬に乗りたる坊主は、いづれの境より出て、何をむさぼりありくにや。このぬしのいへる、是は予が旅のすがたを写せりとかや。さればこそ三界流浪のもゝ尻、おちてあやまちすることなかれ

馬ばくく我をゑに見る夏野哉

註 「このぬしの」は、所蔵者であるか、画の筆者かいずれにしても不明である。

「三界流浪」とは、世の中をさまよい歩く者のことで三界坊とも云う。

「もゝ尻」は、桃の実のごろごろして尻のすわらぬように、乗馬に拙ない者。

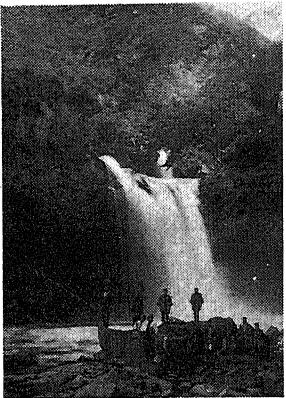
芭蕉のこの句碑は、大月市猿橋町藤崎久保にあるが、建設年は明治末とされており、「馬保久く我を絵に見留夏野哉」とある。

勢ヒあり氷消ては滝津魚

谷村郊外田原の滝、これを一根滝、また白滝と言う。谷村流寓中の囁目吟である。この句の載

籍は芭蕉時代より後の安永六年（一七七七）堀麦水編の「新虚栗」に、春吟と題して「此句今までの撰にもれたるよし但州より告り」と附記して始めて掲載されている。但馬の国へは芭蕉は行っていないので「甲州」の誤記ではないだろうか。

文化六年（一八〇九）刊行した「曉台句集」に「山賊の」「雲霧の」の句と共に三句出してある。



明治末期頃の田原の滝

川口にて

勢ひあり氷柱消えて滝津魚

また、天明三年（一七八三）の秋、曉台が甲州藤田村の可都里を訪ねた紀行「峠中之記」には、「山口（川口の誤りと思われる）にて、勢ひあり氷柱消えて滝津魚」として出ている。

文政十年（一八二七）刊行した毛呂何丸著の「芭蕉翁句解参考」には、天和中の作で前句の初案ならんと註し、また「勢ひなり」の句を出して句形いづれが是か分らぬと言つてはいる。

甲州郡内といふ滝にて

勢ひある山部も春の滝ツ魚

きほひありや氷柱化しては滝ツ魚

勢ひなり氷きえては滝ツ魚

文化六年（一八〇九）に、旧田野倉村（谷村の隣村で現在都留市）の枕蛙窟運水の刊行した、「水面鏡九十四人集」の巻首に、芭蕉像と瀑布を描き中七を「垂水きえて」と異つてはいるが、その上に題句してある。運水の序に「はせをの翁、そのかみ此地に杖を曳て、しら滝の絶勝をのこされし」と記している。

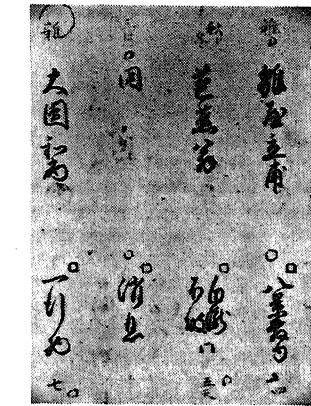
「勢ひあり」の芭蕉の真蹟の所在については、竹堂一峨稿の諺解大全（寛政年代刊）に「此句、

甲斐郡内谷村に白滝といふ滝あり、又田原の滝ともいふべし。此滝にての句なるよしいひ伝ふ。真蹟谷村森島氏の許にあり」とある。

「甲斐国誌」の草稿である「両谷村」の田原滝の名所説明末記に「はせをの詠あり、いきほひあり氷柱消ては滝津魚はせを。深川はせを庵焼失の後谷村に來り、高山傳右衛門の家に暫くやすみしことあり。真蹟利八が家に存せり」とある。

また、「甲斐国誌草稿」には、「桂川の流にして瀑布巖上にかかり、高さ六丈許、田原滝と云、又は白滝と云ふ」とある。

「甲斐国誌」は、文化二年十月編さんによつて着手して文化十一年（一八一四）に完成した。郡内地方の編さんは森島其進が担当したもので、芭蕉の真蹟を藏した利八は其進の父である。



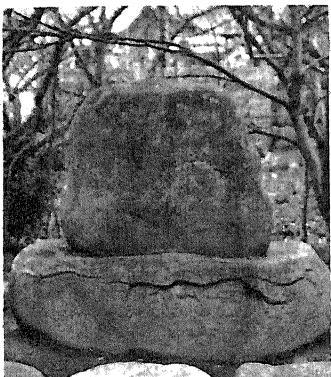
朋来園蔵書画目録

其進は父利八没後、谷村に朋来園と名付けた学舎を開いた。現在森島東三家文書として朋来園蔵書画目録が残されているが、その蔵書は和漢書籍、書画の数実に三千五百余点に及んでいる。その中に芭翁の白滝の発句と消息文、芭翁帖（写）があつたことが誌されている。

嘉永三年（一八五〇）刊行の「鳳朗句集」には、「甲州谷村の西に白滝といへる有、芭翁此地に遊びて、いきほひあり氷柱消ては滝津魚、其真蹟某が家に秘藏す」とあり、実際にその真筆を鑑賞したことを述べている。

田原の滝を展望できる田原神社の境内に、古くから篆額に「芭翁田原瀑布之詠」とあって、「勢ひあり」の句を細字で刻んだ句碑があったが、惜しくも道路工事により紛失してしまった。

現在の句碑は、昭和二十六年に当時の文化関係者により建てられたもので、十月十四日に除幕式を挙行し、雲母主宰飯田蛇笏氏の記念講演と句会を盛大に開催した。碑の書は蛇笏主宰のものである。



芭蕉句碑「行く駒の麦に慰むやどりかな」

所在地 東山梨郡勝沼町万福寺境内

甲斐の山中に立よりて

行く駒の麦に慰むやどりかな

今日の宿を思いながら馬でゆく途中のありさま、
或いは宿に着いてくつろぎ乗った馬を見ているさま
と解く両説がある。

貞享元年（一六八四）八月中旬、二回目の故郷伊

賀上野へ行脚のため、隅田河畔の草庵を出発するに、折から吹く風の声もなんとなくうそ寒げであった。「野ざらしを心に風のしむ身かな」この句の「野ざらし」をとつて、この行脚を「野ざらし紀行」また貞享元年が「甲子年」に当るので「甲子吟行」と言われている。

甲斐で詠んだ句として年代も確実なものであるが、場所については甲斐「さんちゅう」説と、加古坂を越してきた地名の「山中」説との論義がある。

甲斐山中

山賤のおとがい閉る むぐらかな

あたり一面に雑草の藪むくらが伸びはびこっている山の中、下あごを閉じて無愛想な木樵に逢ったさまを詠んだものであろう。



芭蕉句碑「山賤のおとがい閉る むぐらかな」

所在地 大月市初狩町

宝井其角編により貞享四年（一六八七）刊行した「続虚栗」にある。また暁台が天明三年（一七八三）に甲州藤田村の可部里を訪れた紀行文「峡中之記」には、「よし田、山中、砂走などといへる所は、裾のものはしりに家づくりせし村ざと也。芭翁翁武江天

和の変にあひてしばらく留錫ありしも此さかひや」として、この句「山中にて、山賤の頤とぢる
葎かな」の他に、「勢ひあり」、「雲霧の」の三句があつたと記す。

甲子吟行の際の甲斐における句だが、この句も句意にあつて前書の「さんちゅう」説と、
晋風氏等の「中野村の山中」説がある。「甲斐叢記」に大森快庵、保三が附記した翁の句に加古
坂（甲斐山中）とある。

また、「甲斐国志」古跡部の山中村のところに「山中トノミアレバ他所ニテハ地名トハ知ラズ
シテ唯サル山中ノ作ト思ヘドモ芭蕉谷村滞留ヨリ駿河ノ方へ出ルトテ此村ヲ過シ時ノ作ナランモ
知ルベカラズ」とある。

大月市初狩町に句碑があり、明治二十九年（一八九六）に初狩村の古池連中が諸国の俳人に呼びかけ、当時高名の春秋庵三森幹雄宗匠の筆を得て建設したものである。側に「芭翁」と刻んだ碑石のかけらがあり、碑背に安永四年（一七七五）東都松露庵の字が見えるところから、芭翁没後八十二年目に、その徳を慕う松露庵三世木耳坊烏明（享和元年六月十九日没。年七十六）によって建てられたものと思われる。

雲霧の暫時百景をつくしけり

宝曆六年（一七五六）刊行された「芭翁句選拾遺」に「甲州よし田ノ山家に所持ノ人ありしを、

今東武下谷匂志秘藏なるよし、行脚祇法より伝写して出ス」と頭書があつて、「士峰讚」の前文と
この句がある。

「甲斐国誌草稿」にも「芭翁此地ニ遊テ富士ヲ見て雲霧の暫時百景を尽しけり」と詠セシモ此
地ナリトテ傍ニ碑アリ 左モアルベシ」とある。

芭翁が甲州へ流寓して江戸へ帰ったのは五月であるが、この句の季は秋になつており、天和三年作と断定することは躊躇されると云う説と、また「甲子吟行」の旅の時に「霧しぐれ富士を見
ぬ日ぞ面白き」の作があつた頃のものとも想像される。という説もある。

句を作った場所についても、河口湖から見たとは限らず、吉田から仰望した吟ではないかと晋
風氏は書かれている。

士峰讚



芭翁句碑「雲霧の暫時百景をつくしけり」
所在地 河口湖畔産屋ヶ崎

「
崑崙は遠く聞きき、蓬萊・方丈は仙の地也。まのあたり
士峯地を抜て蒼天をさゝえ、日月のため為に雲門をひら
くかと、むかふところ皆表にして美景千変ス。詩人
も句をつくさず、才士、文人も言をたち、画工も筆
を捨てわしる。すて四もじはこや
若覩姑射の山の神人あり有て、其詩よ能

せんや、其絵をよくせん歟。

雲霧の暫時百景をつくしけり

(芭蕉句選拾遺)

註

- 一、西藏と新疆との境を東西に連なる大山系を崑崙山系といへ、崑崙山はその中央部にある。
- 二、中国の仮想上の山。東海中にあつて仙人が住み、不老不死の地と考えられていた靈山。方丈も同じ。
- 三、雲が破れて日月が渡るのを、富士が雲門を開くように言つた表現。
- 四、「莊子」逍遙遊に「藐姑射之山、有神人居焉」とある。北海中にあつて神仙の住むと考えられていた山。

(校本芭蕉全集抜すい)

「雲霧の」句碑は、河口湖畔の産屋ヶ崎にある。中央に「芭翁」と大書し、その左右に振り分けて句が刻まれ、側面に「川口連中」とある。建設年代は化政期と云われている。なお、同じ句を刻んだ句碑が清水市鉄舟寺にもある。

「松風の」の句は谷村での作か

秋元家は、谷村から川越、山形へと移封しているが、山形市薬師町の柏山寺(天台宗)に芭翁の句碑がある。

松風の落葉か水の音すずし はせを

これは高さ二尺三寸、巾六寸ほどの自然石で、それに安山石の台石がある。この碑の傍らに添碑があり

「松風の真蹟は、祖翁行脚の折から、武州川越秋元家の臣高山某方にて客中吟なりしを、泰安寺が乞に任せて染筆し給ふ所なりと。そを此所に移りても持て來りて久しう伝へしに、去ぬる年上州に移転の砌、一ト町吉右衛門へ譲られしとなり、こたびはせを翁の葉風広く後世にも薰らんことを願ひ、且つは謝恩のはしにもなりなんとおもよ余り、奴某ら所望せしに主のゆるし

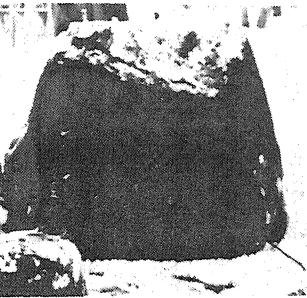
ければ、則柏山精舎の松下に移す所とはなりぬ。

明治三年庚午四月

「南山選寿 俳弟敬述」

とある。この句は、安永五年（一七七六）蝶夢編類題別「芭蕉発句集」には見られるが、創作年代は不明である。

明和七年（一七七〇）麦水編「貞享正風句解」第四巻に「松風の落葉か水の音清し」とあり、麦水はこれに「心耳山間の風に浸す、かの字深意」と附記している。また「芭蕉句選拾遺」にも載っている。



「松風の」句碑の添碑
所在地 山形市薬師町柏山寺境内

高木蒼悟氏は「もし此の句の制作が麦水の見ることく貞享、元禄時代の作とすれば、秋元侯も高山氏も谷村時代であるから、川越秋元家の臣高山某方に客中の吟という事は信じられない事である。芭蕉は元禄七年十月に没している。秋元侯が谷村から川越へ移封になったのは、芭蕉没後十一年目の宝永元年であるから、芭蕉が川越に廻縛を訪ねたことは断じてない。

もしこれが（谷村客中）の作というなら、麦水も貞享時

代の句と觀ていいので、首肯されぬでもない。それにしても麦水はこの句の出自を何によったのであろう。元禄或はそれ以前の載籍によつたものか、句調によつて貞享年代のものと觀たものかであろう。」と誌している。

つまり、「武州川越秋元家」ではなく、「甲州谷村」の誤りである。

泰安寺は秋元家の菩提寺で、谷村では秋元泰朝が寛永十三年（一六三六）に建てたもので、秋元家が移封するたびに新領地である川越、山形、館林に移築され明治維新の際廃寺となつた。芭蕉が染筆したのは廻縛邸に逗留した時に、谷村の泰安寺の乞により染筆したのであり、それ以外は考えられない。



芭蕉句碑「松風の落葉か水の音
すゞし」
所在地 山形市柏山寺境内

「上州へ移転の砌」とは、弘化二年（一八四五）に館林へ移封のときをさしている。「吉右衛門」は豆腐屋であったという。「譲られしとなり」は、松風の真蹟でなく、高山家の邸内に建てられた碑石であるらしい。その碑を送りが吉右衛門に懇望して柏山寺へ移建したものである。

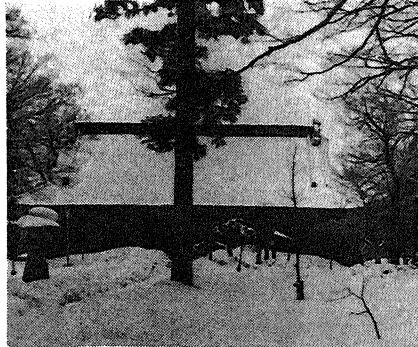
この芭蕉の真蹟を泰安寺が秘蔵していたものを廻縛が屋敷内に建碑し、それを秋元家の移封の際、高

山家がそれぞれの転地に運んだものではないだろうか。

谷村における高山邸は山裾にあり、秋元泰朝時代に開削した谷村堰は、城下町を縦横に流れおり、寝いても水音は枕下を流れるごとく響いてくる。

句意は「峰の松風は折しも松葉落を思はせ、清流の音は清らかに響きて涼しげに聞ゆる」との意味で、この句を味うほど芭蕉が深川で焼け出されたかなしみを、山峡の廬塙邸において味った哀愁をしみじみと感じさせる。

松風を聞き、山峡の水音が響く谷村での作であると確信するものである。



柏山寺
所在地 山形市薬師町

廬塙所蔵の芭蕉遺墨

白亥の「真澄の鏡」に発表されている芭翁の遺墨や、本式俳諧之次第、作法の伝書等は、芭蕉関係を知る唯一の貴重な文献といわれ、偉作揃いの逸品であると激賞されている。

高山家のこれらの遺墨は、惜しくも後年に散逸し、芭翁図録や遺墨集等にその真蹟の写真が掲載され、伊賀上野の菊本氏の蒐集品に廬塙旧蔵の短冊四枚が発表されている。

馬ばくく 我を絵にみん 夏野哉 桃青
鶯を魂にねぐるかたはやなぎ 桃青

「虚粟」には「うぐひすを魂にねむるか嬌柳」とある。嬌柳はしなやかな柳のことで、その眠れるがごとき様に鶯を思い寄せたが、莊周が夢に胡蝶になつた故事（莊子・齊物語）を踏まえてい

三ヶ月や朝貢の夕べつぼむらん 桃青

「泊船集」「虚栗」にある。満月となりゆく今の三日月は、言わば朝顔が夕方まだつぼんでいるといったようなものだとの意味である。

夕顔に米つき休む哀かな 桃青

「続の原」等には「昼顔に米つき涼むあはれ也」^なとして出ている。真夏の暑さに米つきをしていた農夫が昼顔の下で休んでいる姿を見て詠んだものであろう。

芭蕉句集（朝日新聞社）抜すい

芭蕉の廻塙宛書簡二通

東京の安藤兵部氏の蔵として「芭蕉図録」に写真版が紹介され、古くは「真澄鏡」に出ているもので、天和二年五月十五日附松尾桃青名義で高山傳右衛門宛である。

甲州谷村の廻塙から連句の巻を送つて批判を乞うたのに対し、連句作法に関する心得を説き、廻塙の参考に供する意味で才丸、其角、芭蕉の付句を附記している。この六連の付句は他に所見がなく、本簡を通じて初めて知られるものであった。新風体が目鼻立ちを整えてゆく頃の俳壇状勢が察知されるとともに、一つ書した個所から芭蕉の俳諧観が伺がわれるなど、資料価値のゆたかな書簡といえる。

廻塙の俳諧が「古風のいきやう多く御座候て一句の風流おくれ候様に覚申候」と苦言を遠慮なく述べ、それと言うのも「久々爰元俳諧をも御聞不被成」と推諒している。

「爰元」は江戸のことをさし、遠く国詰家老職であった麿崎が俳風の変遷に通じなかつた頃の手簡と思はれる。「校本芭蕉全集」では、この執筆年次についていろいろと考察され、一応天和二年としている。

「真澄鏡」のいま一通は、消息の様式でなく、秘事口訳とされた作法の伝書である。題して「本式俳諧之次第」とある。

麿崎が本式俳諧百韻の形式について文書で教示を望んだのに対し、懇切に説明的伝書を送ったもので年代は不明である。

高山傳右衛門（麿崎）宛 （天和二年五月十五日付）

五月十五日

高山傳右衛門様

松尾桃青書判

貴墨忝致拝見、先以御無為（に）被成御坐珍重（に）奉存候。私無異儀寵有候。仍而御巻致拝吟候。尤感心不少候へ共、古風之いきやう多御坐候而一句之風流おくれ候様ニ覺申候。其段近比御尤、先ハ久々爰元俳諧をも御聞不被成、其上京大坂江戸共ニ俳諧殊之外古ク成候而、皆同じ事のミニ成候折ふし、所ゝ思入替候ヲ、宗匠たる者もいまだ三四年前の俳諧ニなづミ、大かたハ古めきたるやうニ御坐候へバ、学者猶俳諧ニまよひ、爰元ニても多クハ風情あしき作者共見え申

候。然る所ニ遠方御へだて候而此段御のみこみ無御坐、御尤至極（に）奉存候。玉句之内三四句も加筆仕候。句作のいきやうあらまし如此ニ御坐候。

一、一句前句ニ全体はまる事、古風中興共可申哉。

一、俗語の遣やう風流なくて、又古風ニまぎれ候事。

一、一句の細工に仕立候事不用（に）候事。

一、古人の名ヲ取出て何のしら雲などゝ云捨る事、第一古風ニて候事。

一、文字あまり三四字五七字あまり候而も、句のひゞき能候へばよろしく、一字ニても口ニたまり候ヲ御吟味可有事。

子供等も自然の哀催すに
つばなと暮て覆盆子刈原の才丸
賤女とかゝる蓬生の恋 同
よごし摘あかざが薙にかいま見て

今や都ハ鰐を喰らん
夕端月蕪ハはごしこ成にけり 其角
といはれし所杉郭公

心の野を心に分る幾ちまた

同

山里いやよのがるゝとても町庵

いはり

鯛売声に酒の詩を賦ス

愚句

葛西の院の住捨し跡

同

ずいきの戸路壺の間ハ霜をのみ

「校本芭蕉全集」(角川書店)抜すい

本式俳諧之次第

一、初折の面十句。但シ面十句之内名所一つ必出すなり

一、名残のうら六句なり

一、花は先四本五六七八も有之面に花をひとつゝしてもくるしからず

一、月は五句去にいくらもあるべし

一、雪月花郭公寢覚是五色の内いづれも二句去なり

一、猿と檜原山類に用ゆ。往古之式には初折の面十句之内何れも賦物をとる。一順のはじめに賦物を書つくすなり。其後はむづかしき故に発句斗りにふしものをとれるなり

- 一、降るものとふりもの間二句
- 一、五句のもの三句ゝの物は二句去
- 一、七句去のものは十句去なり

右あらまし如此

一、みゆ ウクスツヌフムルシ
むかふの山に雲のたつ。みゆ
あれなる海に舟をこくみゆ
花の垣根に胡蝶とふみゆ

一、下の句つゝ留り

大やうものを二ツ言ならべてとまるべし

譬ば

右も左も袖はぬれつゝ

また

二艘のふねを漕流しつゝ

又ものゝかぎりなき心にもあり

譬ば

たえず渓谷の水流れつゝ

一、上の句つゝ留

是難儀大切な手爾波なりとて先達も多くはせざるなり

譬ば

散花は筏に波にながしつゝ

此上の句の留も下の句のつゝどまりとしたての心相似たり。物を一つにいふと、又かぎりな
き思入などにてとまるべし

一、下の句て留

前句の上の句の五文字に、さればこそ心こそなどある時下の句にててと留るなり。
また前句にもかまはずしててどめあり

譬ば

ラリルレロ

此五文字での字の上におくなり

花のにほひは袖にとまりて。

ものおもふとは色にしられて。

一、下の句に留

譬ば

前句上の句五文字にかさなりてつらなりてなど有時にと留るなり。また前句にもかゝはらず
にと留るあり

譬ば

涙は袖に露はたもとに

花は園生に露はまかきに

右二ツ手本なり。是山を見る玉を見るといふ手爾遠波なり。一大事の秘伝あなかしこへ

右山玉の字を坐の句のかしらにおくなり

一、大まはし発句

譬ば

稻庭敷島の道草の種

或は三段切。かさね切。らん留。をまはし。五文字切。

但シ坐の五文字なり

一、脇てには留

腰に韻字をするであるなり

一、第三韻字留

前句の五文字にかゝらず長高くして一句慥ニとまる。同第三のてにて留申内、あるひはらん。

らんは常の事のやうに候へども口傳あり。又もなし留に留前の句のあひしらひによりあるべし口傳あり。

一、二字のらん留

にはひのみ花は霞に咲ぬらん

雪いと高しふみ迷ふらん

右口傳

一、過現未三ツのし文字

現在のし

山遠し 水高し

過去

過し 見えし 教へし

未来

去りぬべし 来たるべし

一、こそかゝえ手爾波 ヘケセンメ

一、下句のこそどめ ニバ

一、下の句上の句もの字留

野も山も。山も禁む。雪もあられも。などゝも文字を二ツ対していへば留るなり
かむと

一、花に桜付やう

是別て秘するに侍る。前句の花、花がつを、花の袖などゝいふたらば桜を付てくるしからず。前の花別のものなるゆゑに又たとへ本花に仕立たる句なりとも、名字の付たる桜を付候はゞくるしからず。乍去此分にても不功者の人ならば付はだへ相違あらんかと覺束なし。功者ならではいかゞ

一、上の句やと言て下にてと留る事とかく口あひのやならばとまるべし。譬ばその原や近江路やなどゝ名所にかかるや。文字にててと留る事は大かたの人存じたる手爾波なり。又はの字に通ふや。あり是にててと留る也。或はや文字ならずともか文字などにてうたがひの字にてもおさへ字にならひあり、留る事なり

右万々先聖の秘しおかれたまへる事ども也。とくと心にをさめ手に握ることくにても、大事の手爾遠波などをばせぬが連俳のいのちなるべしく

「日本俳書大系」抜下さい

杉風の廬塙宛書簡

安政六年守徹白亥編の「真澄鏡」に「杉風消息」と題され、「廬塙宛芭蕉書簡」、「あかく」との句の自画讀とともに「同處藏こは祖翁の遺語なり。右に倣ふて真跡の本文をあぐるのみ」と前書されて全文が紹介された。発信日の「六月朔日」は、日附けの上の欄外に「元禄八年ナリ」と註書きがある。

芭蕉の没した元禄七年十月二十一日の一年後もので、芭蕉が決して廬塙への信誼を晩年まで忘れなかつたことを立証している。

一 爰近年申候は、「俳諧和哥の道なればとかく直成様にいたし候へ。尤言葉は世に申習しかた言も申候へば、其句のすがたにより、かた言は申べし。それも、道理叶不申候かた言は無用、
④わらわきもうさばがりもぢゅう 坤明申斗用べし」。

一 「段々句のすがた重く、利にはまり、六ヶ敷句の道理入ほがに罷成候へば、皆只今迄の句体打拾、軽くやすらかに不斷の言葉にて致べし。是以直也」と被申候。

一 「前句へ付候事、今日初て俳諧仕候者も付申候へば、かならず前句へ付べからず。随分はなれても付物也。付様は、前句は糸程の縁を取て付けべし。前句へ井て句聞へ候へば、よし」と申置候。句の行やう段々申置候へども、紙筆に不尽申上候。

一 「古事來歴いたすべからず。一向己の作なし」と申置候。

一 爰古法を打破申候事は恋也。「恋の句は句姿は替りても、句の心は同じ事也。恋の心に替りたる心なし。然上は、恋の句は二句にて捨べし。若宜き付句無之時は、一句にても捨べし。恋の句一句にて捨る事、古法に無之事は皆人のしりたる事也。見落しに成ともすべし。かならずく、恋の句つゞけ申事無用」と申置候。

一 「古人の賀の哥、其外作法の哥に面白事なし。山賤・田家・山家（の）景氣ならでは哀深き哥なし。俳諧も其ごとし。賤のうはさ、田家山家、景氣専に仕べし。景氣俳諧には多し。諸事の物に情あり。気を付けていたすべし。不斷の所にむかしより云残したる情、山々あり」と申置候。

一 爰「近年の俳諧世人しらず。古きと見へし門人どもに見様申聞せ候。
一 辺見ては只かるく埒もなく不斷の言葉にて古き様に見へ申べし。

二辺見申ては前句へ付け様合点いき申まじく候。

三辺見候はゞ、句のすがた替りたる所見へ申べし。

四辺見申候はゞ、言葉古き様にて、句の新敷所見へ申べし。

五辺見候はゞ、句は軽くても意味深き所見へ申べし。

六辺見申候はゞ、前句へ付やう各別はなれ、只今迄の付やうは少もなき所見(え)へ申べし。

七辺見申候はゞ、前句の悪き句には付句も悪く、正直にいたし候所見へ申べし。是にて大形合(え)がてんいたす(え)と申べし。

点致べし」と被申候。

一 翁近年の俳諧合点仕候者、江戸上方之門人どもの中に人数三十人斗(ばかりこざあるばく)も可有御座候。其外は前句付、又点取斗仕候へば、其者どもには少も伝へ不被申候。「惣而江戸中・上方ともに十年先の寅の年の俳諧の替り日の所にとゞまり罷在候。其時よりは悪御座候」よし、翁被申候。

一

翁申置候は、「深志成者候はゞ、此段為申聞候様に」と、成の年上り申時分私に申置候間、其元へも申上候。兼々其許へ参可申由被申候へども、彼是いたし、参不申候へば亥の春は罷下り、秋中其許へ参可申由申置候處に、皆夢現と成行申候。此度玉句拝吟仕候へば涙流し申候。

以上

六月朔日

葉舞譜 尚白逐丈へも此段御傳へ可被下候。

杉風

註 1 すらすらとわかりやすく。

2 幼児などのしゃべる不完全なことば。「みつよついつゝむつれあう友達かたらひにもいとつたなきかたことをのみ云侍る」(貞室、かたこと序)

3 道理がよくとおらないこと。

4 わけのわかる。

5 元禄六年の『秋の夜評語』にも「近年の作、心情專に用る故、句体重々し」とある。芭蕉が晩年に感じた俳諧の弊風で、軽みの唱導はこれに基づく。

6 「理に同じ。「段々利につまつて」(世間胸算用二の一)

7 念を入れすぎた句作。「ねこじたるいりほが」(八雲御抄)「いりほがの入りくり歌」(毎月抄)

8 日常使うことば。

9 今日俳諧を始めた人も付けるのだから、前句へ直接付けることはさけなければならない。「蕉門の付句は前句の情を引来るを嫌ふ」(去来抄)

10 前句へ並べて句の意味がよくとおれば。

11 付け運び。「百韻の行やう(中略)連歌は一座のうつり行くさまにて、よくもあしくも聞ゆるなり」(若草山)

12 昔あつたことやその由来。

『連歌新式』に「春秋恋以上五句。(中略) 恋の句只一句にて止むる事無念云々」とあるので、

一般に恋句は二句以上五句まで続ける必要があった。

「又多くは恋句よりしぶり吟おもく一巻不出来になれり。此故に恋句出でて付けよからん時は二句か五句もすべし。付けがたらん時はしゐて付けずとも一句にても捨てよといへり」(去来抄)

この典拠未詳。

15 賤しい人々の噂話。

16 風景などを面白く興あるさまによること。

元禄以後特に景気の句が俳壇に流行した。

18 諸事の物にはそれにもつわる情趣がある。

日常生活の中に昔から気づかなかつた詩情が沢山残されている。

20 古いと誤解している門人。「軽み」の句は平凡陳腐と混同される恐れがあつた。

22 とりとめもなく。

23 納得がいく。

24 「かるきといふは、発句も付句も求めずして直に見る」ときをいふ也。言葉の容易なる、趣向のかるき事をいふにあらず。腸の厚き所より出て、一句の上に自然ある事をいふ也」(俳諧問答)

25 とりわけ。

26 私意を加えずありのままにする。

27 廿四日付の杉風宛書簡、同八月九日付の去来宛書簡などで、人々が「軽み」に移りかねたもどかしさを訴えている。

28 出題の前句に付句をして優劣を争う遊戯的な俳諧。

29 点者のつけた点の多寡を争う俳諧。当時の点取りにはしる風潮を芭蕉は「点取に昼夜を尽し勝負を争ひ道を見ずして走り廻るもの有」(元禄五年二月十八日曲水宛書簡)となげいている。

30 「真澄鏡」の頭注に「貞享三丙寅春の日集撰ノ年ナリ」とみえるが、俳壇への影響度から考え同年春の「鶴の歩み」の百韻を指すとみた方がよい。

31 注27所引の杉風宛書簡に「先づかるみと興と専らに御はげみ、人々にも御申可被成候」とある。元禄七年五月の芭蕉の上京の折。

32 元禄八年。

33 麟塚の在住する甲州谷村。

34 芭蕉の死去をさす。

35 『眞澄の鏡』の頭注に「元禄八年」とある。

36 伝不明だが、延宝八年四月の『桃青門弟独吟二十歌仙』のメンバーに加わっている。